

建設機械車両の需給調整求め 7月7～8日に大闘争！



ただでさえ建設業界の景気が悪いのに、政府は建設機械車両の過剰状態を放置し、過当競争を黙認している。この裏には、韓国建設機械産業協会の積極的なロビー活動があるようだ。機械メーカー側も、内需縮小による利益の落ち込みを挽回するのに必死だ。記者会見でキム・グムチョル委員長の発言がしたように、「韓国政府は新しい雇用を創出しないどころか、いまある仕事すらなくそうとしている」現状だ。

これに対し建設労組は、決死の闘争に打って出ようとしている。「座して死を待つより、闘って死んでやる！最後の一人まで決死抗戦！」というスローガンをホームページに掲げた。

記者会見が終わると、全国から各地の支部長たちはただちに政府庁舎に駆けつけ、座り込み闘争を開始した。ここには国土海洋部(日本の国交省にあたる)と



知識經濟部(経済産業省にあたる)が入っている。この座り込み闘争を通じて、建設機械労働者の念願がなんなのか、そしてどれほどの覚悟であるのかを宣伝した。また、ソウルの中心街でも闘争の意志を宣伝。建設機械部会の組合員たちは、「闘争チョッキ」を着用・ライトを点けて車を走らせている。

政府側はのりくくりと対応しているようだ。豪雨に見舞われるなど、座り込み闘争は決して楽な闘いではない。それでも支部長たちは建設機械労働者の思いを胸に闘い続けている。

この闘争のクライマックスとして建設労組は7月7日から8日にかけて全組合員のショベルカーやダンプ、生コン車を政府庁舎前に動員させる闘争に打って出る。「需給調整委員会」が8日に開かれるためだ。もし要求が通らなければ、8日以降建設機械労働者たちはゼネストに入るとのことである。

決死の覚悟で立ち上がった建設機械の労働者たち。見事勝利を勝ち取ることが出来るか、帰趨が注目される。